

## 佐々木信行のセルフ・アドボカシー・ヒストリー

ピープル・ファースト東京 事務局長 佐々木信行

### 1. どのように、知的当事者としての意識を強めてきたのか。

#### 1) アメリカでのピープルファースト(PF)との出会い (1995年)

自立生活センターが企画した「カリフォルニア州 サーパーティド ライフ会議」に参加  
ただ、アメリカに行ってみなかった。

そこで、カリフォルニアキャピタル PF のダニエル・メドー氏の「元気ができるワークショップ」を体験した。  
僕は、ダンス・パフォーマンス「チーム夢人間」で自分の気持ちを体で表現するワークショップをやっていたけど、ダニエル氏のワークショップは、司会者と参加者の会話していくうちに、  
どんどん「自己決定」をしようとする気持ちが高まっていった。

そして、「どんな優秀な支援者の言葉より、当事者の言葉を聞くことが大切だ」とおしえてくれた。

#### 2) PF 活動開始・支援者との対立 (1996年)

PF はなし合おう会(現 PF 東京)が設立し、月2回の定例会がおこなわれていた。

その定例会は、最初の数ヶ月は、支援者の A さんばかりが話をする会議だった。

これでは、PF にならないと思った支援者3人は、PF を日本に紹介した自立生活センターの身体  
障害当事者へ相談に行った。

PF は知的障害当事者の会なのに、なぜ支援者だけで相談に行ったのか と怒った。

僕たちの会が、A さんから3人の支援者にコントロールされてしまうことがこわかった。

#### 3) カミングアウト「知的障害」・PF事務所設立 (1996年～1997年)

知的障害の養護学校で勉強をしてきたけど、親の方針で愛の手帳(東京都の療育手帳)を持  
っていなかったの、自分が知的障害であるとなかなか認められなかった。

アメリカの PF 知的障害当事者が、自分より立派にみえたことが、自分が知的障害と認められた  
のかもしれない。

PF はなし合おう会事務局長として、みんなが集まる場所があり、そこで仕事ができることで、知的  
障害当事者としての意識が強くなった。

#### 4) 自立生活開始 (2002年)

入所施設から地域で自立生活を始めていく仲間が沢山いたけど、僕は在宅で親と暮らしていた  
ので自分とは関係ないことだと思っていた。親がいるので、何で自立生活しなければならないのか  
といつも親に言われていた。

でも、PF の仲間からも自立生活していない事務局長では、いくらPF運動の講演をしても説得  
力ないといわれた。支援者から、地域でNPO法人を取得したのは、一緒に地域で暮らしていく  
ためだと言われた。自立したPFの仲間や他の自立生活センターのスタッフから「佐々木は自立す  
ることは難しい」と言われたことも悔しくて自立した。

## 5)施設内の虐待問題に立ち向かう (2003年～2006年)

知的障害の仲間に対しては、何をしても何も言えないと思われていることに怒りを感じた。

### <七生福祉園溺死事件>

PFが近くにある知的障害入所施設七生福祉園のオンブズマンをしていて、月1回利用者の相談にのっていた。その施設で入浴中に利用者が溺死した。福祉園がオンブズマン会議に、A41枚で2～3行の事故報告をみて、原因を調べようとしないうちに腹がたった。両親は七生福祉園を訴え、PFは両親を支援し、弁護士会議をしたり、裁判傍聴したり、両親といっしょにたたかった。

### <カリタスの家事件>

新聞報道で知ったカリタスの家事件については、2004年PFJが結成して緊急特別行動チームをつくって最初に取り組んだ虐待事件。全国の仲間が福岡に集まって、施設や県庁に行き抗議行動をしたり、地元で集会をした。その後、民主党や調査チームを送ったり、尾辻厚生労働大臣が調査したり、自分たちの運動が、政治的な動きと関係があることを実感することができた。

厚生労働省では、抗議活動の中で、交渉をして実際にカリタスであった虐待を役人に、目の前でお湯を沸かし熱湯のコーヒーをつくってみせたり、木酢液をコーヒーだと言って飲めるかどうか、などを体験させて、県と施設が「不適席な行為」としか認めなかったものを虐待だと言わせた。

## 6)GD案・自立支援法反対運動 他の障害団体との連携 (2004年～2005年)

2004年にスタートした支援費制度を利用して、多くの知的障害の仲間が地域生活を始めた。しかし、厚生労働省は、お金がかかりすぎると言って、支援費を減らそうとしてグランドデザイン案(2004年)や自立支援法案(2005年)を提案してきました。全国の他の障害の仲間といっしょに、闘ってきました。残念ながら2006年10月に法案が国会をとおってしまいました。

しかし、この3年間にわたって、毎年他の障害のある団体と協力して闘ってきたことで、他の障害者団体と多くの友人になることができたこと、障害者団体として行政と交渉したり、国会議員に働きかける運動に関わられたことは、大きな自信になった。

## 7)ピープルファーストジャパン(PFJ)設立 (2004年)

PFJを設立するために、4年間に渡って、議論をして会則をつくったことは大きな意味があった。

どのような組織をつくるべきか、協議会方式やブロック方式など難しい話だったけど、みんなで勉強して理解できた。総会が一番の決議機関であること、役員の役割や組織とは、たくさんの確認する必要があることなどを知ることが出来た。PFJ会員証が手元に届いた時に、多くの仲間は療育手帳以外に始めて手にした身分証明書でした。僕たちは、社会の一員であることを自覚しました。

PFJの結成大会には、PF香港とPFにーゼランドの代表を招待し、挨拶をしてもらったとき、世界の仲間といっしょに運動ができることが嬉しかった。世界育成会(I.I.)と国連の会議などに参加した時に、自分たちの席に「PFJ」というネームプレートを見た時、PFJは日本の全国組織であるだけでなく、日本を代表する組織なんだということがわかった。

## 8) GHで虐待された仲間を救いだし、自立生活とPF運動へ (2005年～ )

GHで虐待されていたCPと知的障害のYさん(男性)は、不安定になると言葉が話せないこともあり、GHで暴れることが多かった。GHのK法人理事長は、Yさんをベッドに縛りつけたり、薬を飲ませて眠らせたり、入所施設に送ることもあった。僕は、YさんのGHに10日間泊り込んで、その実態をつかみ、東京の支援者の協力を得て、Yさんの自立生活プログラムに取り組んだ。Yさんは、K法人から3名のスタッフといっしょに介助派遣事業を開始した。同時、その地域でPFを立ち上げた。Yさんの自立とPFの設立できるまでは、ヘルパーや支援者のやり方に、当事者として口を出すことは難しかったけど、支援者まかせにはいけないと思うようになった。大きな自信になった。

## 8) 韓国の仲間へPFを (2007年)

PFJと韓国の仲間と一緒に実行委員会をつくって、DPI世界会議の中で韓日交流ミニミニ大会を開催した。僕たちは、カナダやアメリカのPF大会に参加したことをきっかけに、14回のPF大会をひらき、PFJをつくることができた。僕たちの経験をPFJの仲間と一緒に、韓国の仲間に伝えることができることは本当に嬉しかった。3日間の実行委員会の活動だったけど、韓国の仲間は、真剣に話を聞いてくれて、PFJの仲間と一緒に一生懸命準備に取り組んでくれた。僕は、韓国の仲間がPFをつくるまで支援していきたい。

## 2. 知的障害当事者は、どうすればセルフ・アドボカシーに出会えるのか。

### 1) 当事者から当事者へ

これを原則にしたいけど、現実にはなかなか難しい。どうしても当事者と当事者の間には支援者が入ってしまう。直接相談を受けて、自分が中心になってPFを伝えることができたのは、13年の運動の中でYさんしかいないと思う。最初の相談やPFの問い合わせが、直接当事者からでなくても、当事者同士の関係につくりなおすように、一対一で話をするなどの努力している。

### 2) 非当事者から当事者へ

親・家族  
学校  
作業所  
介助派遣事業者  
地域生活支援者  
施設職員  
学識経験者

### 3) 重度知的障害のある人へどうするのか

佐々木やPFのメンバーは自分でできるけど、重度の人はどうするのかと良く聞かれる。PFは自己決定ができない人はいないと考えている。同じ知的障害という差別を受けている者として、PFのような当事者団体が代弁すべきだと思う。